

## ラトビア政府、加藤晴生専務理事に叙勲

民間外国人に贈る最高の勲章「クロス・オブ・レグニション」

第3回サロンコンサート開演前にヴァイヴァルス大使が登壇し、「大使館開設よりずっと前から、日本とラトビアの親善の為に貢献され続けた一人の方がおられる。日本ラトビア音楽協会の加藤晴生専務理事です。今日はこれまでの多くの貢献にお礼を申し上げるべく、加藤さんにラトビア国家の勲章《クロス・オブ・レグニション》を授与したい。形は小さな勲章ですが、加藤さんのやったことはもっとも大きいものです。おめでとうございます」とスピーチして加藤専務理事を招き寄せ、賞状と勲章を授与した。《クロス・オブ・レグニション》は、社会の為に貢献した民間外国人に贈られる最高の勲章で、大きな賞状には加藤専務理事の功績を具体的に記し、ヴァルディス・ザトレルス大統領直筆のサインがあった。

加藤専務理事は「とてもとまどっています。ラトビア共和国から身に余る光栄を賜ることになりましたが、ありがたく頂くことにいたします。評価された事からは皆さんのお陰で、私一人でなし得たものではありません。私は単に皆さんを代表して頂いたに過ぎません。日本ラトビア音楽協会は、これからますます仕



賞状を胸に喜びの加藤専務理事

事の量が増えますが、皆さんのご支援をお願い申し上げます」と英語で謝辞を述べた。

当協会にとって誠にお目出度い快事、この日の参加者全員が大きな祝福の拍手を贈った。

今回の勲章授与は本国でも大きく報道され、加藤専務理事の功績を紹介し、称えた。

## 第3回ラトビア大使館サロンコンサート

在日ラトビア共和国大使館と日本ラトビア音楽協会が共催する「第3回サロンコンサート」が7月3日、同大使館で行われ、40名近い聴衆が集って、準備された椅子が満席になる盛況だった。



今回の出演者は、渡辺ゆきさん(ソプラノ)、佐々木英彦さん(ピアノ)、白井朝さん(バイオリン)、風呂本佳苗さん(ピアノ)の4名。

最初に登場した渡辺さんと佐々木さんは初登場で、共に東京混声合唱団のメンバー、というよりラトビア語教室の熱心な受講生でもある。二人とも合唱団「ガイスマ」に顔を出したこともあり、最初からこの日の聴衆と仲間感覚で和気藹々の雰囲気。東混のバスパートマスターでもある佐々木さんは、この日、渡辺さんのピアノ伴奏者として登場した。

二人はいきなり「ラトビア国歌」をアカペラで見事に二重唱して驚かせ、さらに渡辺さんはラトビア語で挨拶するなどサプライズの連続。「Manai Dzintenei (我が祖国に)」など馴染みのラトビアの歌の数々は「ガイスマ」メンバーにとっても嬉しいプレゼントだった。日本の歌では、横浜市民を代表して「横浜市歌」を歌い、続く「ていんぐさの花(沖縄民謡)」も美声を生かして秀逸



ヴァイヴァルス大使が出演者に花束贈呈(左から白井朝さん、風呂本佳苗さん、渡辺ゆきさん、佐々木武彦さん)

だった。

続いて馴染みの二人、白井朝さんと風呂本佳苗さんが登場して「シューベルトのソナチネ一番」「シューマンのロマンス2番」を演奏、初共演とは思えない見事に息の合ったバイオリンとピアノのデュオだった。風呂本さんはサロンコンサート2度目の登場で、最後は風呂本さんが、J・ヴィートルスの作品を2曲演奏した。ラトビア作曲家の作品を完全に自分のものにした見事な演奏で、強いタッチにピアノが悲鳴を上げていた。

ヴァイヴァルス大使が4人の演奏を称え、大きな花束を贈呈したあとは、定例の懇親会。外は小雨が続いていたが、大使館と協会が用意した美食、美酒を堪能しながら、いつまでも談笑が続いた素敵な一夜だった。

## 「ラトビア流ビジネスのすすめ」

ヴァイヴァルス駐日大使



ヴァイヴァルス大使は、海外投融資情報財団「JOI」5月号巻頭に「所感=ラトビア流ビジネスのすすめ」を掲載、ラトビアが、日本と欧州、ロシア・CIS諸国との架け橋として、これらの地域でのビジネスに最高の環境を提供していると力説した。同

大使は特筆すべき点として次の4点を強調した。

①欧州とロシア・CIS諸国間をつなぐ整備された輸送インフラ。3つの不凍港は、周辺地域の中で最大の貨物量を誇ります。充実した鉄道網および道路網が、欧州とロシア・CIS諸国を結んでいる。こうしたロジスティクスの長所を活かし、2008年、株式会社日新により、ラトビアを経由しロシア・CIS諸国向け貨物を取り扱うサービスが開始された。

②東欧における金融の中心地である首都リガには、外貨を含め27の銀行が、その卓越したサービスを提供している。

③IT、製薬業、応用物理、遺伝子工学をはじめとするハイテク分野が発

展している。日本とはすでに協力の実績があり、例えば、ラトビアのGrindeks社は、大鵬薬品と30年以上の取引の歴史がある。最近では2008年に、ラトビアのZABBIX社がNTTコムテクノロジーとネットワークマネジメントシステムのパートナーとして契約を締結する。

④能力の高い人的資源。国民の高等教育修了者の割合は、カナダに次いで世界2位。加えて、自国語のほか、英語、ロシア語、ドイツ語などを話せる人口の割合が高く、近年では、日本語や中国語を勉強する人も増えている。



世界遺産に指定されているリガの旧市街は「バルトのパリ」と呼ばれ

ている。リガの街に魅了されながら、日本と欧州、ロシア・CIS諸国をつなぐ仲介貿易やハイテク関連ビジネスを行うのが、ラトビア流ビジネス。そのために不可欠な通信インフラも完備しており、ラトビアのブロードバンドは、2008年の性能調査で世界4位にランクインした。さらに、駐日ラトビア共和国大使館とラトビア投資開発公社が、ビジネス・マッチング支援や日本企業のラトビア訪問及び進出支援を行っている。2008年には、繊維業界やロジスティクス分野などの企業代表団がラトビアを訪問、ラトビアからは、約40企業の訪日を受け入れた。

(註) 当協会HPトピックス6月22日に全文掲載。

## JAL直行チャーター便、リガ空港で大歓迎 ラトビアがグリーンと近くなった！

前号で紹介したJALのリガ直行チャーター便が8月4日、350名の乗客を乗せて無事リガ国際空港に着陸し、両国の関係に新しい歴史の1ページを開いた。乗り継ぎ時間を含め、従来より8時間半も短縮されて所要時間は10時間半、ラトビアがグリーンと近くなった。当日、同国際空港では両国の要人・関係者が出迎え、盛大な歓迎セレモニーが行われた。リガ大聖堂少女合唱団（お馴染みのアイラ・ビルジーニャさん指揮）、メティンシュ音楽学校少年合唱団、踊りのアンサンブル“ジントラシユ”らが、歌と踊りで歓迎し、搭乗客を喜ばせた。初の直行便を利用した観光客は、ラトビア国内はもちろん、リガ空港を起点にリトアニア、エストニアにも足を伸ばした。

◇

当日の様子はDiena、LETAが次のように報道した。（要約）

8月4日JAL機が初の日本からのチャーター便で到着し、ラトビアの政府要人や空港関係者が出迎えた。チャーター機には日本の観光業界の代表団も乗っており、彼らのラトビア訪問は初めてである。

ボーイング747で乗り入れたチャーター便は、昨年拡張された滑走路に着陸し、船用の放水と、伝統芸能で歓迎した。ラトビア側は、リガ国際空港の総支配人Peteris Krisjanis、リガ副市長Ainars Slesers、経済相Artis Kampars、日本大使Takashi Osanai、在日本ラトビア大使Peteris Vaivarsらが出迎えた。

直行便により、乗り継ぎ時間を含めた時間よりも約8時間減り、10時間半のフライトとなった。リガ国際空港は、大陸間航空便やトランジット面での空港の有利な地理的位置を



リガ国際空港で大歓迎を受けるJAL直行チャーター便。大聖堂少女合唱団もコーラスで出迎え。下は花で作られた両国国旗

強調し、今後アジアやアメリカなどへの路線を持つ大きな航空会社の乗り入れは経済的にも好ましいことである。

日本観光協会Akira Kanai氏によれば、経済危機の影響で日本人の海外旅行も影響を受けているが、それでも旅行欲は残っており、西ヨーロッパだけでなく、中欧や北欧への人気もある。旅行需要を喚起するため、新しい魅力を持つ都市が模索されている、と言う。また、日本観光協会Yoshiaki Honpo氏によれば、日本の旅行業界は近年、ラトビアのルンダーレ宮殿や、リガ歴史地区などの観光名所に注目している。初のチャーター便の運行が、ラトビアの国民の日本への理解を高めるとともに、ラトビアの人々もまた日本で迎え入れることができるようになればいいと話した。（堀口大樹訳）

## 「バトル・オブ・リガ」上映に長蛇の列 DVDでも発売！

ラトビア映画「バトル・オブ・リガ」の日本初上映（6月6日・15日東京国立近代美術館フィルムセンター）は、チケット発売前から長蛇の列。満員の観客は、期待通り、簡潔で明快なストーリー展開と感動的な内容に酔った。日本・EUフレンドシップウィークの一環として行われる「フィルムフェーズ09」で上映されたものだが、ラトビア映画が超満員に膨れ上がったのは今回が初めて。今年はEU加盟国の選りすぐった21作品が上映された。この作品は、ラトビア国内で公開されてから一カ月で、ハリウッド映画「タイタニック」が記録した観客動員数を上回り、1990年以降のラトビアで最も視聴される映画になった。DVDで発売され（5000円）、レンタル店で借りられる。

【あらすじ】時は第一次大戦後の1919年。戦争から疲弊して祖国ラトビアに戻った兵士マーティンシュは、国に残した婚約者のエルザとの平凡な生活を夢見ている。だが、結婚式の当日、ドイツ人将校のめぐみにより、ラトビアの首都リガが攻撃される。二人は何とか脱出を図るが、マーティンシュは再びエルザと



離れ、祖国を守るために戦いに参加することを余儀なくされた。数千の義勇兵を従えたラトビア軍は、侵略軍の侵攻を阻止し、奇跡的な勝利でラトビア共和国は独立国としての地位を確固なものにした。マーティンシュとエルザはついに故郷に戻り、幸せな未来に向けて歩み始めるのであった。

ラトビア軍が首都リガを開放した1919年11月11日の出来事を背景に描かれた壮大な歴史ドラマ。昨年11月、国を挙げて祝った独立90周年の意味がよく理解できる。

## ラトビア指揮者・プトニンシュ、東京カンタートに招聘

合唱界のビックイベント、ゴールデンウィークの「東京カンタート」に、今年もラトビアの指揮者、カスパルス・プトニンシュ氏が招聘され2度目の来日を果たした。今年の東京カンタートもラトビア共和国大使館が後援した。今回は、公募合唱団「Tokyo Cantat2009カレッジ・クワイア」と、「女声合唱団彩・女声アンサンブルJurilはるか」の指導に当たり、5月5日のクローゼンコンサートでその成果を披露した。滞在中、東京・山梨で公開指導やセミナー講師を務めるなど日本の合唱界に貢献した。カレッジ・クワイアと初対面の時は「風よ、そよげ」で歓迎され、大喜びだった。

同氏は1992年以來ラトビア放送合唱団の指揮者。1994年ラトビア放送室内合唱団を設立、ヨーロッパ、北米、東アジアへのツアーを行った。2005年エストニア国立男声合唱団の主席指揮者に就任、リアス室内合唱団、アイルランド国立室内合唱団、ユーロクワイヤーなど多くの合唱団の客演指導を続ける。2000年に

ラトビア文化科学大臣賞を受賞した。

「今年もまた日本で皆様と一緒に、音楽への愛と想像的活動に溢れ、思慮に富み、喜びに満ち溢れたTokyo Cantatの一週間を享受できたことを心より嬉しく思います。ともに音楽をつくることを通じて、我々人間は非常に親近感を感じることが出来ます。今年も我が母国の音楽を日本の皆様にご紹介する機会をいただいたことをありがたく思っています。ラトビア及び全てのバルト諸国の文化の中で、合唱は重要な役割を担ってきました。一緒に歌うことの必要性という、まさに同じ遺伝子を地球の反対側一日本一の地で認識するのは、なんと素晴らしいことではありませんか」。



カレッジ・クワイアの初練習

### 創立5周年記念レセプションのご案内

日本ラトビア音楽協会 会長 藤井 威 専務理事 加藤 晴生

お蔭様で日本ラトビア音楽協会は今年創立5周年を迎えます。下記の通り記念レセプションを開催いたします。会員相互の親睦を深めながら、今後の展開・夢を大いに語り合いたいと思います。ヴァイヴァルス駐日大使閣下他、大使館の方々も出席されます。大勢の方々のご出席を期待しています。

記

日時 9月19日（土）12：00～14：30

場所 皇居前 桜田門「法曹会館」

千代田区霞が関1-1-1 電話 03-3581-2140

http://www.hosokai.or.jp/

会費 7000円（予定）

会員の皆さまには別途ご案内いたしますが、スケジュールを空けてくださるようお願い申し上げます。

## ラトビアとのボーイスカウト友情プロジェクト'09

ボーイスカウト富士地区 川島 泰彦 受けました。3名だけで聴くのはもったいないという事で多くの富士市民も拝聴の機会を得ることが出来ました。

さて、3名の8月2日から12日の盛り沢山なスケジュールはラトビアスカウト連盟が立ててくれました。ラトビアのスカウトの家庭に滞在しながら、世界文化遺産リーガの市内見学をスタートに、シングルダでのハイキング、サイクリング、バルミエラでのカヌーツアー、クルディガでのキャンプなど至れり尽くせりです。10日には在ラトビア日本大使館公式訪問、最後にオグレのスカウト博物館を訪ね、2年前、私がラトビアに返還したシルバーウルフ章に挨拶します。滞在中にスカウト達の友情はますます深まるものと信じ、わずか10日間の滞在ですが大きく成長して帰ってくるスカウトの顔を見るのが楽しみでなりません。



昨年の夏ラトビアから3人を招き、日本の若者達と交流し友情を深めたことについては協会ニュース14号に述べさせていただきました。今年はこちらからラトビアを訪問する年です。3月に3名が選考され、彼らはこれまで都合10回の事前研修を重ねて、ラトビアの事を学んで8月2日の出発を興奮を抑えきれずに待っております。

バイバルス大使は4月18日と6月13日の2回、富士市までわざわざおいいただき若者達に大変素晴らしい話をして下さいました。特に6月13日には当地に350年続いているお祭りを浴衣姿のスカウト達のエスコートで楽しめました。これから訪問する国の大使から直接話を聞くチャンスに恵まれた3名はかなり緊張していたようでした。

7月11日にはラトビア大使を務められた田中享様にもご足労いただき、2時間に渡る内容の濃い講義を

最後に3名を紹介いたします。

1. 具志堅唯 大学2年 20歳 ガールスカウトリーダー

「現在大学で外国人に教えるための日本語教育を専攻しています。昨年の交流でラトビアで日本語を教えることを目標とすることが出来ました。ラトビアとの交流が長く続くことが私の願いです」。

2. 平井慎太郎 高校2年 17歳 ベンチャースカウト 「2007年に英国で開かれた世界ジャンボリーに参加して、外国の人たちとの交流の大切さを学びました。昨年ラトビアのスカウトのホスト役を務め、ラトビアとの交流に興味を持ち、より交流を深めるため参加を希望しました」。

3. 遠藤彩加 高校2年 17歳 ベンチャースカウト 「昨年ラトビアスカウトのホーム



(上) ヴァイヴァルス大使から激励される左から具志堅、遠藤、平井の各スカウト  
(下) 大使の珍しい浴衣姿、3人のスカウトも緊張解消



ステイを受け入れ、自分も海外体験をして視野を広めたいと思いました。音楽の国ラトビアの人々と私の好きなピアノを通じて友好を深めたいと考えています」。

## ラトビアの墓

### 黒沢 歩

お盆の季節です。ラトビアでも8月になると、「墓祭り」と直訳できる風習が各地の墓地で行なわれています。「死」は、ラトビアの民俗観にとっても欠かせない重要なテーマです。昔話の英雄は死んでも超自然的に再生し、またある昔話では、悪人だけが死に、善人は生きながらえます。生きている者が暖かく、死んでいる者が冷たいのもっともなことですが、ラトガレ地方の愉快な昔話は、賢いラトビア人の農夫が間抜けなジブシーに（もしくは夫が間抜けな妻に）死者を見分ける方法を次のように教えます。（注：昔話ではこうした話をジブシーや女性への蔑視とは捉えず、ラトビア人と男性を文明世界に属する者、ジブシーと女性を自然界に近い存在と定義する昔話ならではの分類が見られます。）

ある日、農夫がジブシーに言ったとき。「おまえが死ぬときゃ、おまえの体中が暖かくなるよ。なんだよ」これを聞いたジブシーが戸外に出て座っていると、おやおや体がもう暖いじゃありませんか。さて、怖くなったジブシーは路上に走り出て地面に倒れ込み、「俺は死ぬぞ！」と大声を張り上げた。地面に寝転ん

でいた罰にこん棒で尻たたきを受ける羽目になったというのに、ジブシーはそのこん棒を死から救い出してくれた万能薬だと信じ込んで、大喜びで胸に抱きかかえて家に帰っていったとさ。

また、次の昔話では、「死」が人格化されているのがよくわかります。

年老いた男は、薪にするための枝の重い束を背負って歩きながら、早く死がやってきてこの重荷から解放してくれたらなあ、と願います。そこで「死」が現れると、男はまるでびくびくしてしまって、さっきの願いをもう思い出さたくもありません。重い束を背負うのを「死」に手伝ってほしかっただけだったと言っています。

フォークロア上のラトビア人は、困難に陥ったときにその逃げ道として「死」があることを知ってはいても、死の後に続く未知を恐れていたようです。

死の存在は、昔話と民謡だけでなく、迷信や笑い話にも現れます。民俗学者でもあるペーテリス・シュミッツが編纂した「ラトビア民族の信仰（迷信）」4巻本（1940—1941年刊行）のうち、結婚／婚姻に関しては28ページであるのに、葬式／墓

地／魂／死者／死に関しては85ページもあります。だからといって、ラトビア民族に特別な墓地信仰があるとは一般化することはできません。クリシュヤーニス・パロンス編纂の「ラトビアのダイナス（民謡）」には、婚姻の歌がほぼ3巻を占めるのに対して、葬式の歌が全体のほんの一部でしかありません。結婚についての歌は多く、また結婚式でも盛んに歌われるのに対して、葬式では代々引き継がれ語り継がれて来た慣習やタブーの信仰があるのです。また、フォークロアでは、生と死、豊穡と腐敗は、ひとつの総体の二面性という伝統的な観点から対等な関係にあると捉えることができます。

人が昇って天に辿り着く「長い豆」という「ジャックと豆の木」を連想させる民話があります。人が天まで昇ったとき、そこで人は果たして生きているのか死んでいるのかははっきりしないのですが、どうも生きているようです。

おはよう、神の息子さん 父さんと母さんを見かけたかい？ …父と母はドイツの地の太陽の娘の嫁入りで酒盛りをしているよ



ラトビアでは墓標もいろいろ。写真は、三角屋根つきの民族調とロシア正教の十字架

こうした感覚が生きているラトビアの、木立に囲まれた墓地は、まるで祖先と対話するような空気が漂い、私がラトビアでもっとも静謐さを感じる空間です。

※黒沢歩さんは最近結婚され、16年間のラトビア生活を終えてこのほど帰国されました。（編集室）

## 会員近況短信

小林 信一

(財合音楽振興会常務理事)

東京混声合唱団の運営と制作を担当しています。30年前に財合音楽振興会を設立し、事務局長常務理事就任。今公益法人改革に沿って体勢を変えていく作業をはじめています。



ところで、ラトビア映画「バルトオブリガ」は5月にフィルムセンターで上映後すぐDVDレンタルになりましたが、ラトビアに関心を持つ方は必見です。ロシア戦線から帰った主人公と市民が今度はドイツとの戦いを強いられ、古都リガの街が戦場になり変わります。ラトビアの独立記念日になっている11月11日夜の戦いがリアルに描かれスペクタクルとしても一級ですが何しろ街全体が戦場になるという異常事態から勝利にむかうなかでたとえば教会の鐘を鳴らして戦況を伝えるエピソードなど感動的です。2006年にコンサートのため滞在したばかりでしたので風景もなつかしく、次回訪問の機会にはぜひ戦った方々の眠る墓場も訪れたいと思いました。

久元 祐子

(ピアニスト・当協会理事)

日本ラトビア音楽協会で理事をさせていただいております久元祐子と申します。



ラトビアに最初にお伺いしたのが、1991年の春のことでした。ラトビア国立交響楽団とモーツァルトのピアノコンチェルトを共演させていただきました日のことは、今でも強く印象に残っております。ラトビア独立前夜の頃のことでした。あたたかな日差し、メルヘンのように美しい街並み、人々の強い音楽への愛情…。それ以降もワグナーホール、ブラックヘッツなど素晴らしいホールでリサイタルをさせていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。またこれからもラトビアのピアノ作品の紹介などを通じて素晴らしいラトビアの芸術をご紹介させていただくことができましたら、これに勝る喜びはありません。

風呂本 武敏

(関西日本ラトビア協会理事)

風呂本 淳子

(城西国際大学客員教授)

武敏はアイルランド文学を勉強していますが、英語教員として勤務した神戸大学と愛知学院大学を定年退職。



グローバルズの文化論で、少数民族の発言にも注目が集まり、無視できない世界が来ます。ラトビアとアイルランドにとってうれしい出来事に思えます。

淳子は奈良女子大学定年退官後、関西から新幹線通勤しています。専攻はアフリカ系アメリカ文学及びカリブ文学。研究のきっかけは、学生時代に従兄(加藤晴生氏)に招かれ、早大グリークラブのコンサートで聴いた黒人霊歌に感銘を受け、歌詞の分析を始めたことにあります。ラトビアとのご縁も従兄を通してです。

二人ともグローバルな流れに抗する少数文化の研究に従事して参りましたが、ご縁があってラトビア文化も学ばせていただくことになりました。ラトビアの食文化、音楽なども大いに楽しませていただきます。なお武敏は関西日本ラトビア協会の理事をさせていただくことになりました。(編集室註)お二人はピアニスト・風呂本佳苗さんのご両親です。

野村 三郎(メロス音楽研究所代表・ウィーン在住)

“貧乏暇なし”の言葉通り、毎日仕事に追われてこの夏も過ぎております。



早稲田の講義を7月末に行い、その足で私が創立いたしました霧島国際音楽祭30周年に参りまして、ウィーンに戻るや否やザルツブルク音楽祭に8月6日から参ります。有難いことにまだ書く仕事を頂いております。老骨に鞭打ちつつこの夏も過ぎす事になりました。もし音楽にご興味がおありの方がいらっしゃいましたら、「音楽の友」7月号、10月号をご覧くださいませと大変幸せに存じます。

前田 二生

(指揮者)

東京レヴェース・シンガーズ、新東京室内



オーケストラの常任指揮者の傍ら、スロヴァキア国立ジリナ室内管弦楽団名誉音楽監督を務め、同オーケストラと毎年ウィーン楽友会主催コンサートに出演するなど、多忙な生活が続いています。また、アジア諸国との音楽交流にも力を注ぎ、韓国、中国、台湾、香港などで交流コンサートを行っています。ラトビアは一度是非往訪したい国です。

アイラ・ビルジーニャ

(指揮者・在ラトビア)

8月4日、リガには特別な行事がありました。JAL機の直行便が、リガ国際空港に350人を連れて飛んできました。これは、ラトビアと日本の定期運行の始まりになるでしょう。93年以来の両国の関係強化の歴史において、大きな意味を持っている出来事です。



リガ空港で行われた記念行事に、私が指揮しているリガ大聖堂少女合唱団が歌ってきました。メディンシュ音楽学校の少年合唱団と、踊りのアンサンブル「ジントリンシュ」もいました。日本にもこの情報が伝わると幸いです。

迫 秀一郎(ホテルサンルート総支配人・当協会理事)

先日、早稲田大学を卒業して45周年、ホーム・カミング・デイご招待の案内状が届きました。早いものです。学士号取得というよりは、グリークラブ楽士の資格を取ってサラリーマン生活に入り、あと少しでその幕を引こうとしていますが、いよいよ本格的に音楽を楽しむ生活に埋没してゆきたいと思えます。だからラトビアなのです。皆さん



よろしくご指導下さい。

## リーガの街にもマトリョーシカ

白石 仁章

外務省外交史料館

マトリョーシカ、木製の人形の中に次々と少しずつ小さい人形が入っている可愛い玩具で、最もポピュラーなロシア土産の一つではないだろうか。そして、筆者が訪れた範囲では、ラトヴィア、リトアニア、エストニア、フィンランド、ポーランド、チェコと旧共産圏ないしはソ連の周辺国でも様々なマトリョーシカがあらちこちで売られていて目を楽しませてくれた。



実は、1994年にロシアの文書館調査のためモスクワに滞在した際、すっかりマトリョーシカに魅せられてしまい、その当時なのでエリツィンが一番外側で歴代のロシアないしはソ連の政治指導者が次々現れるマトリョーシカが沢山売られていたので、エリツィン、ゴルバチョフ、ブレジネフ、フルシチョフ、スターリン、そしてレーニンの後にはロマノフ王朝のニコライ二世、アレクサンドル一世、エカテリーナ二世、そして最後にはピョートル大帝に至るといって10体の人形が入っている楽しいマトリョーシカを入手し、気に入りの一品になっていた。

それ以来、しばらくロシアにも東欧諸国にも訪問する機会に恵まれな

かったのだが、2002年にフィンランドおよびバルト三国を訪れると、どの国でもマトリョーシカを売っ

ていたのは嬉しい驚きであった。そこで、プーチンが一番外側のマトリョーシカを是非手に入れたいと考えたのだが、リーガで無事なかなか大きいものを入手した。少し面長な、いささか鋭さに欠ける可愛いプーチン・マトリョーシカ(こちらはプーチンからレーニンまで7体)であり、今も筆者の部屋にエリツィン・マトリョーシカと仲良く並んでいる。

このマトリョーシカであるが、日本が起源だという説が有力なことはご存じでしょうか?箱根に行くと、入り子人形が売っているのをご覧になった方も多いと思うが、19世紀に箱根のロシア正教会を訪れた修道士が土産として買い求め、ロシアに持ち帰った入り子人形がアレンジされ、マトリョーシカとなったのである。両者があまりにも似ていること、そして、当時の良好な日露交流を考えれば、この説は信用に値すると思われる。

そして、現在リーガの街中でも売られ、多くの人々の目を楽しませていることを考えれば、日本の文化がロシアを通じてラトヴィアに伝えられた例の一つと考えることも可能であろう。是非、ラトヴィアと日本双方の人々に知って頂きたいと思い、今回は一見ラトヴィア・日本関係にはあまり重要ではないマトリョーシカをあえて採りあげたと思います。

## リサイタルご案内

ラトビア期待の星、  
抜群の人気女流ピアニスト  
ソルヴェイガ・サルガ



06年、07年に来日してピアノファンに衝撃を与えたソルヴェイガ・サルガが今秋来日し、同じオペラシティ リサイタルホールでリサイタルを開きます。主催は日本ラトビア芸術友好協会、ラトビア大使館と日本ラトビア音楽協会が後援します。是非、お聴きになることをお勧めします。

【日時】2009年10月3日(土)

17:00開場/18:00開演

【会場】東京オペラシティ リサイタルホール(京王新線「初台」駅東口下車)

【入場料】前売り:3,000円

当日:3,500円(全席自由)

【プログラム】

(I部) ブッソニー: 幻想曲短調、モーツァルト: 幻想曲ハ短調、リスト: ソナタ風幻想曲「ダンテを読んで」  
(II部) ショパン: 子守歌変ニ長調、ゴンドラ舟唄、マズルカニ長調、ノクターン変ホ長調・変ハ長調・ハ短調、ラヴェル: 「夜のガスパール」よりオンディーヌ、水の戯れ  
※プログラムは予告なく変更になる場合があります。

【主催】日本ラトビア芸術友好協会

【後援】在日ラトビア共和国大使館、日本ラトビア音楽協会、バルト三国インフォメーション・センター

【企画制作】ブレイン コウスキミュージックアンドサウンド(株)

◇

ソルヴェイガ・セルガは8歳の頃からダールジンシュ音楽学校でピアノ奏法を学んだ後、ラトビア音楽アカデミーでピアノと作曲を学ぶ。現在はラトビア文化士院の博士課程に在籍。2000年にフランスのマリーズ・シェラン第七回国際ピアノコンクールでディプロマを獲得。その後、ニューヨークのプリテン・オン・ザ・ベイ国際ピアノ音楽作曲コンクールにおいて幻想風ソナタ「何処へ？」で入賞し、当地で楽譜が出版された。

2004年、ラトビア文化士院より「ラトビアの国家的独自性を持つ作曲家」として高い評価を受けた。ピアニストとしてはラトビア国内はもとよりフランス、イタリア、オーストリア、米国などの他、2005年から2007年にかけてはベルギー国内各地でコンサートを開催。06、07年は東京オペラシティ リサイタルホールほかで演奏会を開催した。2008年リガのブラックヘッドで開催された日本紹介の写真展中に、尺八の為のソロ曲「川面の輝き」と「花びら」の2曲を作曲し発表した。同年10月に来日し、ラトビア大使館でソロリサイタルを開いた。

楽しいクラシックの会コンサート  
「久元 祐子の世界～  
ピアノソロから三重奏まで」



当協会理事としても活躍されているピアニストの久元祐子さんの演奏会。久元さんは独立前の1991年にラトビアでラトビア国立交響楽団と共演されて以来、J・ヴィートルズらラトビア人作曲家の作品を積極的に演奏されている。

【日時】10月1日(木)

午後7時開演

【場所】アミュー立川(全席自由 2000円)

【プログラム】

モーツァルト: 歌劇《後宮からの誘拐》序曲(ピアノ編曲版)

モーツァルト: ピアノ・ソナタ変ロ長調 KV281

ハイドン: ピアノ・ソナタ変イ長調 Hob.XVI-46

モーツァルト: ピアノ三重奏曲変ホ長調KV498《ケーゲルシュタット》

シューマン: 《おとぎ話》作品132

【出演】久元祐子(ピアノ)、武田忠善(クラリネット)、坂口弦太郎(ヴィオラ)、磯山雅(お話)

【主催】楽しいクラシックの会

【共催】(財)立川市地域文化振興財団

※詳しくは久元祐子HPをご覧ください。  
<http://www.yuko-hisamoto.jp/>

## コンサート短評

エレルヘイン少女合唱団  
(エストニア) 東京公演  
皇后陛下もご臨席



エストニアが誇るエレルヘイン少女合唱団の東京公演を聴いた。エレルヘインは、エストニアの野に咲く花の名前(サクラソウ科)だが、文字通り北の大地に咲く美しく可憐な花の歌声。今回の来日したのは15歳から20歳の可愛い少女たち41名。ffからppのレンジ幅が信じられないほど広く、ハイピッチで複雑な不協和音も、全くビブラートがない透明で淡彩な響きが会場いっぱいにこだましましたが、北欧の自然の中で育った人たちが醸し出せる音だという気がした。

名指揮者ティアー・エステル・ロイトメ女史の存在感が格別。一人ひとりを存分に歌わせなら一曲一曲を芸術性豊かに創り上げ、時には茶目っ気を垣間見せて、客席の全員を楽しく幸せな気分させた。

この夜、美智子妃殿下もお聴きになった。天皇皇后両陛下がバルト三国を歴訪された時(2007年)、彼女たちがエストニアの「歌の広場」で、コーラスで出迎えたことへの返礼の意味もあったのだろう。ピーター・ミラー駐日エストニア共和国大使がお迎え役を務められた。

日本の作曲家・指揮者の松下耕氏は、ロイトメ女史と10年以上の長い親交があるが、この日のプログラムに同氏の作品を3曲加え、客席にいる松下氏に振らせると言うハプニングがあった。メンバーたちは一糸乱れぬ演奏を披露、ロイトメ女史はハグして松下氏を称えた。

コーロ・こせやま

Green Summer Concert

共立女子大学合唱団OG21名による爽やかな合唱団。2年に1度演奏会を開いて今回が5度目。

今回は①「Mass of St.Cecilia」(J.E.Turner曲)、②女声合唱とピアノのための組曲「小さな虹」(萩原英彦曲)、③無伴奏女声合唱による日本名歌集「ノスタルジア」(信長貴富編曲)より4曲、④女声合唱曲集「落葉松」(小林秀雄曲)という変化に富んだ、且つ親しみやすいプログラムを、中村義春氏、福井香織氏という対象的な指揮者が振り分けた。初挑戦のミサはさすがに緊張気味だったが、2ステからは本当に幸せいっぱいの豊かな表情で、歌う喜びを客席と共

プログラムはルーマニア作曲家のミサ(グローリア)に始まり、エストニアの作品はもちろん、イギリス、フランス、アメリカ、日本など世界各国の作品を加えていた。「虹のあなたに」などアメリカの歌になると発声までアメリカ的になってアメリカの合唱団のムードを醸し出したのには驚き。本当に多彩な合唱団だ。この日の真髄はやはり後半のV・トルミス作品群(子どもの頃の思い出、合唱組曲「四季の図」(全11曲)で、メンバーも最も緊張して歌った。文字通り「絶品」で、この夏一番の贈りものだった。(7月30日・杉並公会堂大ホール)

ロイトメ女史(1933年生まれ、タリン国立音楽大卒)は大変な親戚家で、豆腐、刺身で日本酒を飲むのが大好きだとか。暖かくて優しく、時には茶目っ気も発揮する。姉妹がチェリノブイリ原発事故で死去したこともあって特別に平和志向が強く、同女史の強い希望で8月6日に、広島で演奏会を開催した。1989年、同合唱団の指揮者に就任し、世界中の人々を魅了する今日のエレルヘインを創り上げた。

今回の日本ツアーは7月16日に成田に到着して直ぐ北海道へ飛び、釧路、札幌、盛岡、仙台、福島、秋田湯沢、東京、和歌山、広島、大阪で演奏会を開いて8月8日に関空から帰国した。



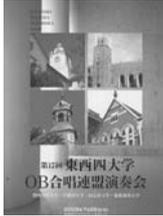
感じていた。前半の白から後半には赤にドレスを変えるなど華やかさも格別。演奏もソプラノのピッチが以前よりかなり安定し、特に「小さな虹」が素晴らしかった。無伴奏の「ノスタルジア」は、誰でも知っている懐かしい歌を凝った編曲で歌ったが、歌本来の情感を伝え切れなかったかも知れない。最後のステージでは指揮者の福井香織が、ゲストの松崎郁未(ソプラノ)と共に美声を披露する場面もあった。ピアノは宮尾美保さん。(7月25日 サントリー小ホール)

## コンサート短評

第17回東西四大学  
OB合唱連盟演奏会

出演者300余名 会場は超満員  
男声合唱健在を強力に誇示!

この演奏会は1977年(昭和52年)から2年に一度、関西、東京交互で開催されている。今年も各団70名から80名を超えるメンバーが熱演、圧倒的なボリューム感で歌へのひたむきな情熱を聴衆にアピールし、自らも素晴らしい仲間たちと歌い続ける喜びを満喫した。合唱界は男声合唱の凋落ぶりが目立つが、この演奏会の熱気に触れると、心配は無用という感じがした。演奏は四団とも甲乙つけがたい熱演。四団それぞれが、「自分たちが最高だった!」と思った筈。



現役時代は四大学合同演奏会に最も燃え、競争心をむき出しにしたものだが、OB四連はお互いの友情を暖め、一層の親睦を図ることが趣旨。それでも、今年のプログラム挨拶に「これからも楽しく競い合いながら歌いつづけます」とちよびり本音も…。伝統・実力とも伯仲の四団が、良い意味で競い合う心があるから、こんな見事な演奏会を開けるのだとしみじみ感じた。

## ①新月会

男声合唱組曲「雪明りの路」(詩:伊藤整、曲:多田武彦、指揮:広瀬康夫)

1959年(昭和34年)に関学グリーが委嘱初演したこの名曲を、80名余が一糸乱れぬ見事な演奏で全聴衆を完全に魅了した。伝統の関学トーンに更に磨きがかかり、長いピアノシモの美しさ、ベースのユニゾンの豊かな音楽性などなど、これぞ関学グリーの真髄と言える演奏だった。

## ②稲門グリークラブ

男声合唱曲「岬の墓」(詩:堀田善衛、曲:團伊玖磨、編曲:福永陽一郎、指揮:西田裕己、ピアノ:前田勝則)

混声合唱の名曲を、1975年(昭和50年)に早稲田グリーが福永氏に男声版編曲を委嘱して初演した。この時の学生指揮者が西田君で、福永氏から直々に受けた薫陶に加えて、卒業後30余年の指揮者としての研鑽が加わり、極めて音楽性豊かに、起伏に富む15分余のドラマを演じた。西田君と同期で初演仲間の影山日出夫君(NHK論説委員でお馴

染みの顔)も、自信満々の表情で熱唱していた。地から湧き出るようなフォルテシモの力強い響きは、さすがにこれぞ早稲田、強いタッチのピアノをかき消していた。この曲は1983年(昭和58年)の第4回四連OBで演奏し、筆者もオンステしただけに懐かしさも格別だった。出来は今回が圧倒的に良かった。

## ③クローバークラブ

「魂の叫び～Afro-American Spirituals～」(指揮:小林香太)

同志社が伝統的に最も得意とする黒人霊歌集。80余名が黒のシャツ・ズボン姿(数人が赤シャツでアクセントを付けた)で若々しく会場いっぱいひろがり、動きも加えて歌いだすなど、先ず視覚で魅了した。男声合唱ファンなら一度は歌ったことのある作品で構成し、楽しさいっぱいステージ。早いテンポの部分でややリズムの不揃いがあつたが、古いメンバーも含む80名の動きが伴う舞台だけに上々の出来。

④慶応義塾ワグネル・ソサイエティ  
OB合唱団

男声合唱組曲「過ぎし日」(詩:北原白秋、曲:多田武彦=本年度委嘱作品、指揮:畑中良輔)

慶応義塾創立150周年(2008年)を記念して、今年誕生した作品でこの日が初演。「源平将棋」「水ヒヤシンス」「糸車」「汽車のほび」「見果てぬ夢」「秋の日」の全6曲を一度も音取りせずに一気に歌いきった。4団体中最多オンステ数でワグネルの並々ならぬ気迫と自信を感じた。演奏前に87歳畑中氏が延々と曲目解説したのは(約8分間)蛇足に過ぎたか。

## ⑤合同演奏

男声合唱曲「枯木と太陽の歌」(詩:中田浩一郎、曲:石井歆、指揮:佐藤正浩、ピアノ:前田勝則)

昭和30年代、大学男声合唱全盛時代の作品で、誰もが一度は歌ったことがある名曲。大人数でフォオルテシモを叫ぶ快感は格別だった。300名を超す合同演奏には格好の作品でもある。正に会場が割れるようなフォルテシモだった。まあお祭りのエンディングだから細かいことは言うまい。このボリュームなら、ピアノは2台にすべきだったかも知れない。(7月26日 すみだトリフォニー大ホール)

第58回東西四大学合唱演奏会  
圧巻だった早稲田グリーの  
「縄文ラプソディー」

伝統・実力とも、大学の男声合唱をリードしてきた東西のいわゆる

《ピック4》が、昭和27年から年1回、一度も欠かすことなく、それぞれの最高の演奏を披露して競い合った演奏会。いつもながら緞帳が揚つて、舞台後方に掲示された各団旗を目にし、全メンバーが各大学別に並んでエールの交歓が行われるひと時は、各OBにとってたまらない興奮を味わう。今年は慶應が30名、同志社が22名、関西学院が43名、早稲田が約70名とオンステ数に差があつたが、それぞれが伝統の力を充分発揮した演奏。とりわけ今年は、作曲家・荻久保和明氏が自ら指揮した早稲田の「縄文ラプソディー」が轟然と音を放ち、会場を揺るがした。往年の雄姿を彷彿とさせる演奏で、聴衆の心を捉えた。とりわけ今年は、作曲家・荻久保和明氏が自ら指揮した早稲田の「縄文ラプソディー」が轟然と音を放ち、会場を揺るがした。往年の雄姿を彷彿とさせる演奏で、聴衆の心を捉えた。

①慶應義塾ワグネル・ソサイエティ  
OB合唱団 (30名)

男声合唱組曲「柳川風俗詩」(詞:北原白秋、曲:多田武彦)を、音楽界の重鎮・畑中良輔氏の指揮で演奏。四連演奏会が始まった昭和20年代後半の作品だが、冒頭に、平野忠彦氏が柳川の情緒を豊かに語る朗読で雰囲気盛り上げ、全ての点で素晴らしい好演だった。畑中氏の卓越した音楽作りはさすがで、古い作品とは感じられない新鮮さに満ちていた。

## ②同志社グリークラブ (22名)

「北欧の風景」と題した、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンの作曲家作品集を演奏した。指揮は「なにわコラリアーズ」などの指揮で注目を集める伊東恵司氏(同クラブOB)。人数は少ないが、ステージ一杯に広がって一人ひとりが自信に満ちた表情で醸し出す透明なハーモニーが秀逸だった。一見地味なステージを終曲で一気に盛り上げた。

## ③関西学院グリークラブ (43名)

全6曲からなる無伴奏男声合唱曲

## カナダで「ラトビア歌の祭典」開催

第二次世界大戦終了後のソ連によるラトビア統治時代、カナダ、アメリカ、オーストラリアや西欧に亡命したが、亡命したラトビア人たちは、ラトビア人としての連帯感を持ち合い、アイデンティティを強める手段として「歌の祭典」の伝統を守り続けた。1952年、カナダのトロントで「Latvian Song Day」が開催され、その2年後の54年10月には、第1回「カナダ・ラトビア歌の祭典」が開催された。今年は13回目を迎えた。開催されたのは7月1日～5日で、この期間、ハミルトンの下町はラトビア一色になった。



関西学院グリークラブ



早稲田大学グリークラブ

「いつからか野に立つて」(詩:高見順・曲:木下牧子=2003年)を、やはり関西を中心に活躍する実力派若手・本山秀毅氏(京都市立芸大出身)の指揮で演奏。戦前から賞を独占していた、いわゆる伝統の関学トーン健在を実感させる素晴らしい響きだった。ベースがとてよよく鳴っていた。

## ④早稲田大学グリークラブ(約70名)

1987年と同クラブが委嘱初演した「縄文ラプソディー」を作曲家・荻久保和明氏自らの指揮で演奏(ピアノ:前田勝則)。「噴煙」「賛歌・悲歌」と題されたヴォカリーズに、宗左近の詩集「縄文」からの「滝壺舞踊」に作曲したものを挟んだ3楽章からなる。極めて意欲的で、難解なリズム・ハーモニーと強烈なフォルテシモと極端なピアノシモを要求されるこの作品を、早稲田70名が一糸乱れぬ見事な演奏で、やはりこの日の圧巻だった。ピアノの前田勝則氏も見事だった。

## ⑤合同演奏

「合唱のためのコンポジションⅢ」(曲:間宮芳生)を、佐藤正浩氏(東京芸大音楽家出身)の捧で演奏。男声合唱の定番とも言える日本ムードたっぷりの作品を、早稲田の演奏で興奮したあと、楽しく聞いた。初めてこの作品を歌うメンバーも多かったと思うが、よく練習していて、全員が本当に豊かな表情で歌った。(7月5日 昭和女子大人見講堂)

7月1日 民族の日 ラトビア音楽・民族ダンス競技会など。

2日 開会式 民謡から現代音楽まで、歌を通しての祝賀。祭典は太鼓の音で最高潮に達した。

3日 民族衣装のショー、ミュージカル、野外での集い(パーベキューなど)が賑々しく行われた。

4日 新バレー競技会、ラトビアフォークダンス、大合唱コンサートなどが行われ、北米の合唱団も参加。

5日 閉会式 北米・ラトビア人500人による民族舞踊スペクラルがあり、最後はフェアウェルディナー、フェアウェルダンスで閉幕した。

## 「壁があるところには道がある」

### 人間の鎖(バルトの道)から20年

オルヤス・カルニンシュ

(ラトビア・インスティトゥート局長・元駐米ラトビア共和国大使)

冷戦末期の1989年。世界にはひとつの壁と、ひとつの道があった。ひとつは取り壊され、ひとつは新たに生まれ、そして冷戦は終焉を迎えた。

1989年は世界情勢が著しく変化した年であったが、なかでもベルリンの壁崩壊は冷戦時代の終わりを象徴する大きな出来事であった。一方で、ベルリンの壁崩壊から2ヶ月遡った1989年8月23日。分厚い鉄のカーテンに覆われた先では、200万人のラトビア人、リトアニア人、エストニア人が手をつなぎ3国を結び、国家の独立を求めて大規模なデモンストレーションを展開していた。エストニア・タリンから、ラトビア・リガを通り、リトアニア・ヴィリニウスまで続く



600km以上の人間の鎖は、「バルトの道」と呼ばれた。ベルリンの壁と同様に、このバルトの道はソビエト連邦の存続に重大な変化をもたらした。

ベルリンの壁崩壊が、ヨーロッパにおけるソ連衛星国の終わりを告げるものであれば、ラトビア、リトアニア、エストニアで展開されたバルトの道は、ソ連圏内における同国支配の終焉の始まりを告げるものであった。当時、スターリンからゴルバチョフ政権に至るまで、ソ連に対する抵抗はいかなるものでも許されないと考えられていた。その考えは、1989年2月にグルジアのトビリシでソ連軍により20人のデモ参加者が殺されたことから、間違っていないように思えた。しかしそれから半年後、200万人のバルト人がソ連当局に衝突し、正式な許可を得ないまま、未だかつてない平和的デモンストレーションを展開した際、当局

は実行行使に至らなかった。これには、非暴力主義者のガンディーも感心したことであろう。

モスクワはバルト人による大規模なデモ行為を糾弾した。その後の2年間で、ソ連の実力行使により、ヴィリニウスとリガで死傷者を出したが、この時点で独立に向けた運動は誰にも止められないものとなっていた。1991年8月、歴史的なバルトの道からたった2年後、バルト3国は主権を取り戻し、独立国家として世間から認められた。

本年は、この波乱の1989年から20周年にあたる。バルトの道が展開された1989年8月23日とは、独立不可侵条約の締結から50周年にあたる日であった。この条約にはスターリンとヒトラーによる、かの有名な秘密議定書が含まれており、後にラトビア、リトアニア、エストニアの併合およびヨーロッパを分断することになる、鉄のカーテンを引く

1989年8月、バルトの人々は彼らを覆うソ連のカーテンを取り払うべく行動を起こした。続く11月、ドイツの人々は彼らの国を分断する壁を取り壊した。バルトの道は、ベル

リンの壁崩壊に続く道としても役割を果たしたのだ。

ベビーブーム時代に生まれ、冷戦時代を生きた私達の世代にとって、1989年に起こった一連の出来事とその結末は予想できないものであった。特にラトビアから離れ、ワシントン、ロンドン、ブリュッセルなどで勤務していた者にとってはそうであろう。しかし、リガ、プラハ、ブダペストあるいはベルリンなど現地で生活していた人々にとっては、既に変革の時であったのだ。

冷戦とその終焉を体験した者は、それぞれ異なる記憶をもっているであろう。私の場合は、いまだ鮮烈なイメージが記憶に残っている。1989年、私達は壁があるところには、必ず道があると証明した。

ラトビア、リトアニア、エストニアは、バルトの道をユネスコ世界記録遺産に登録すべく必要書類を提出している。全ての記録、資料はwww.balticway.netで閲覧可能である。

※この論文はラトビア大使館から提供されました。全文は当協会HPの8月3日付けトピックスに掲載＝編集室)

## 柔道界も日本との交流を切望している！

### 黒沢歩氏、ラトビア柔道取材し、価値あるレポート

昨年、東京で黒沢さんと食事をした時、「日本柔道はラトビア柔道界と正式な交流がなく、私(柔道新聞編集長)も全く事情が分からない。機会があったら取材してくれませんか」と話したことがありましたが、それを覚えてくれていた黒沢さんが、ラトビア柔道連盟などを取材して素晴らしいレポートと写真を送ってくれました。ラトビアに於ける柔道の歴史、現状はもとより、柔道が発祥した日本を彼等が深く尊敬し、交流を

望んでくれることはじめて分かりました。写真の1枚に私は大きな感動を覚えました。道場の壁の中央に、柔道の創始者・嘉納治五郎の写真、その左右に日本国旗とラトビア国旗が常時掲示されているのです。

ラトビアに日本流の礼儀正しい柔道が定着していること、旧ソ連時代もラトビアの選手がソ連代表選手として世界で活躍していたこと、ラトビア柔道界はいま宗家日本の援助を必要としていることなどなど、日本柔道界にとってはスクープの内容です。

私の個人的都合で目下「柔道新聞」は休刊中の為、柔道専門誌の最大手「近代柔道」に掲載する手配をしました。発売中(9月号・8月22日発売)の近代柔道を是非ご覧ください。近く当協会HPにも全文を掲載する予定です。このレポートが契機になって、日本とラトビアの間に柔道でも新しい友好関係が生まれるかも知れません。是非そうなるようお願いしています。(徳)



## 大阪でもラトビア語教室スタート(関西日本ラ協)

### 講師は国費留学生のリンダ・ガルワールさん

関西日本ラトビア協会でもラトビア語教室がスタートした。第1回は6月16日午後6時から開かれた。初日の受講生は7名。場所は大阪の名誉領事館(大和ハウス内)。その後も隔週の火曜日に行われている。講師はリンダ・ガルワールさんで、大阪大学大学院後期過程で比較文学を研究している28歳のラトビア人女性(国費留学生)。大学でロシア語のティーチングアシスタントを勤めながら、ラトビア語の教材を少しずつ作っていたという(大阪大学ではリトアニア語の授業はあるが、ラトビア語の授業はまだない)。

授業はなかなか厳しく、初日の授業の終わりに宿題を出された。それでも授業終了後は、東郷武名誉領事夫人が用意してくれたサンドウィッチをつまみながら和気藹々のおしゃべりを楽しんだ。

教室はその後も順調に成果を挙げている。90分間の授業は長いので、



リンダ講師は色々工夫をこらし、「夏至の歌」を全員で歌えるようにもなった。関西日ラ協会は、9月5・6日に堺市で行われるオペラ公演に出演するラトビアオペラ歌手の歓迎会を開く(8月23日)が、その会場で歌いたいという声があがった。ところがリンダ先生、「え??練習する時間がありませんよ。それに、夏至の歌を8月に歌ったら変な人(=酔っ払い)と思われる」と、ストップをかけたとか…。いずれにしても楽しく充実した授業が続いているようです。

※オペラ公演の詳細は次のサイトをご覧ください。

<http://sakai-city-opera.com>

## ラトビア語教室第5期がスタート!

3年目に入ったラトビア語教室は、7月1日から15名で第5期がスタートしました。大使館のサロンの定員12人を超え、時には補助椅子を使っただけの授業となっています。

講師の堀口大樹氏は、教材のプリント作成、宿題の作文添削などももちろん、最近、「前回のゲストのスピーチで使われたラトビア語を思い出す」、「ゲストの方にラトビア語で質問する」などの課題を出して、受講生のラトビア語習得のために工夫を凝らしています。

4月8日にラトビア料理の講習をしてくださったEdīteさんが、大使館員のご夫君Dzelmeさん共々近く

帰国されることになり、8月5日に2回目の「ラトビア料理教室」をして戴きました。今回のメニューは、ラトビアで大変ポピュラーなポテトサラダ（お米入り）、ハンバーグ、肉団子のスープの三品でした。前回同様、大使館の厨房をお借りし、食材や料理法をラトビア語で復習しながら進められました。出来上がってからはお楽しみの試食会です。

Edīteさんが茶道に大変興味をお持ちだと伺ったので、感謝の気持ちをこめて、小川翠さんがラトビア語で解説をしながら茶道のお点前をご披露しました。また、佐々木武彦さんと渡辺ゆきさんがデュエットで歌をお聞かせし、最後はみんなで「Put, Vejini」を歌いました。

これからも、大使館、協会のご理解、ご支援を戴きながら、ラトビア語教室の充実にも努めたいと思っています。(植木)

## 合唱団「ガイスマ」は43名に!

前号のご報告以降、新しく、吉武優子さん(ソプラノ)、佐良土美枝子さん(アルト)、宮地和夫さん(バス)が入団され、メンバーは43名(ソプラノ11、アルト13、テノール8、バス9)になり、練習場も社会福祉法人パール地下1階の講習室に変わりました。同じ渋谷から徒歩圏内でピアノもあります。団名は全員の投票で「日本ラトビア音楽協会合唱団「ガイスマ」と決めました。ガイスマは「光」の意味です。

山脇卓也指揮者は、「出来るだけ新しいレパートリーを増やしたい、同時に今まで歌った曲を詩の言葉味わいながら感情を込めて歌おう」と、極めて意欲的に指導を続けています。同指揮者は、皆さんが歌いたい曲を募集中です。レパートリーは新しく「光の城」「歌いながら生まれ歌いながら育った」が加わりました。

7月27日は練習後に、2回目のワンコイン(会費500円)親睦会を開き29名が出席しました。用意した飲み物、おつまみの他に、料理上手なメンバー手作りの料理や、ワインの差し入れなどもあり、和気藹々と蒸し暑さを吹き飛ばすような楽しいひとときを過ごしました。(高仲)

## 情報断片

♪…すっかりお馴染みになった大鵬薬品様の広告が、今号からなくなりました。06年3月(第4号)から09年5月(第15号)まで3年余の間、当協会の創設期を支え続けてくださったことを、心からお礼申し上げます。当編集室もページ数を気にすることなく、各種情報を原則的に割愛せず掲載できたことは本当に幸せでした。有難うございました。♪…ホームページに少しずつ訪問者が増え、広報の一端を担えるように

なってきました。しかしネットだけでは会員の皆さまへの連絡や情報伝達を全うできません。今後は減ページを余儀なくされますが、協会ニュース「Latvija」と2本柱で、それぞれの特性を活用しながら広報の役割を果たして行く所存です。ネットでは速報性、豊富な情報量、カラー写真の掲載などをフルに活用しますが、一方では新聞でしか出来ないバランス良い情報や意見の伝達、残したい記録掲載などがあり、企画記事も工夫してまいります。ただ、どちらも会員各位から寄せられる情報・ご意

見で作り上げていくものです。今後とも、どんどんネット・紙面をご活用くだされば幸いです。♪…協会の目的の一つに会員相互の親睦があります。今号から「会員近況短信」欄を新設し、会員お一人お一人がどういふ方を皆さまに知って頂く工夫を加えました。次号からもっと多くの方々に登場していただきます。♪…今号の1面トップは、躊躇なく加藤晴生専務理事の受賞に決めました。ラトビア政府が贈った「クロス・オブ・レコグニション」は素晴らしい

価値の高い勲章です。当協会の創設と活動は全て彼の強力な牽引力によるものですが、協会設立以前からラトビアへの貢献を続けていたことも高く評価されました。9月19日開催の創立5周年記念レセプションで、改めて会員一同から祝意と敬意を表したいと願っています。多くの方々が出席されるよう期待しています。♪…精力的に活動を続けておられるヴァイヴァルス大使の珍しい浴衣姿が川島泰彦会員から届きました(3面)。本号発行後、HPにカラー写真で公開します。お楽しみに。(徳)

## 残暑お見舞い申し上げます

<p>日本ラトビア音楽協会 会長 藤井 威</p>	<p>藤井 威 明子</p>	<p>日本ラトビア音楽協会 専務理事 加藤 晴生 TEL&amp;FAX 04-7132-5423 Email katohr@jcom.home.ne.jp katohr@earth.ocn.ne.jp</p>
<p>元駐ラトビア日本大使館臨時代理大使 田中 享</p>	<p>福島県芸術文化団体連合会副会長 日本ラトビア音楽協会顧問 福島市音楽運営委員 板垣 忠直 〒960-0102 福島市鎌田字舟戸17 TEL 024-553-2745 FAX 024-554-0647 E-mail yanakyo@d6.dion.ne.jp</p>	<p>遠藤税理士事務所 日本ラトビア音楽協会常務理事 税理士 遠藤 守正 〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 TEL 042-745-3335 FAX 042-740-4725 Email 0424668801@icom.home.ne.jp</p>
<p>日本ボーイスカウト富士地区 (株)友愛協会(友愛スポーツ) 川島 泰彦 〒417-0051 静岡県富士市吉原2-11-15 TEL 0545-52-4005 FAX 0545-52-4004 Email yas@yuaisports.com</p>	<p>多賀 清雄 〒380-0882 長野市富田飯綱山1-626 TEL 026-239-2575 Email kikitaki@ngn.janis.or.jp</p>	<p>しびれる旨さ 大連米線 味は定評ある新風中華料理。ご会合にご利用頂けます 御徒町駅から徒歩2分。ホットペッパーからヤフーグルメをご覧ください 代表取締役 大成 宣行 台東区上野3-20-2 TEL 03-5818-5657 URL www.mixian.jp</p>
<p>駐日ラトビア大使館・日本ラトビア音楽協会共催 ラトビア語教室 講師 堀口 大樹 連絡先 植木佐代(事務局長) TEL&amp;FAX 03-3751-0134 Email uekisayo@beige.ocn.ne.jp</p>	<p>日本ラトビア音楽協会直属 混声合唱団「ガイスマ」 指揮者 山脇卓也 連絡先 高仲和子(幹事長) TEL 03-3339-3139 FAX 03-3339-3159 Email t.kaako@nifty.com</p>	<p>Tik tālu-tik tuvu.Japāna-Latvija ～近くて近い、日本とラトビア～ 日本ラトビア音楽協会は今年創立5周年を迎えました。 ホームページ <a href="http://jlv-musica.net/latnews/index.php">http://jlv-musica.net/latnews/index.php</a> 情報提供・ご意見は <a href="mailto:htoku@pastel.ocn.ne.jp">htoku@pastel.ocn.ne.jp</a> (徳田)</p> 